

<p>All Of Me オール・オブ・ミー</p> <p>Jimmy Scott ~Live In Tokyo ジミー・スコット ~ライブ・イン・トーキョー</p> <ol style="list-style-type: none">- オープニング- Opening (7:26) オール・オブ・ミー All Of Me (G. Gatoe , S. Sanna) (4:56) あなたは恋を知らない You Don't Know What Love Is (D. Rays , G. De Paul) (6:49) 瞳を閉じて I'll Close My Eyes (B. Kaye - B.Reid) (6:21) ペニーズ・フロム・ヘブン Pennies From Heaven (J. Burke - A. Johnston) (5:48) タイム・アフター・タイム Time After Time (S. Cahn - J. Styne) (6:09) 時には母のない子のように Sometime I Feel Like A Motherless Child (A. A. Smith) (9:02) アイ・クライド・フォー・ユー I Cried For You (A. Freed - G. Arnheim , A. Lyman) (7:34) - アンコール#1 - Encore #1 (2:10) ホワイ・ウォズ・アイ・ボーン Why Was I Born? (O. Hammerstein 2nd - J. Kern) (6:21) - アンコール#2 - Encore #2 (1:24) エヴリバディーズ・サムバディーズ・フール Everybody's Somebody's Fool (R. Adams , G. Hampton , A. Adams) (5:06)

ジミー・スコット & ザ・ジャズ・エクスプレッションズ

Jimmy Scott And The Jazz Expressions

ジミー・スコット Jimmy Scott (vocal)

T.K.ブルー T. K. Blue (alto sax & flute)

ジョン・リー・ゲン Jon Regen (piano)

ビル・グリーン Hilliard " Hill " Greene (bass)

ドゥエイン・ブロードナックス Dwayne " Cook " Broadnax (drums)

録音：2003年7月27日 B-flat(東京 / 赤坂)にてライブ・レコーディング

*

Produced by Tetsuo Hara.

Recorded at B-flat Akasaka, Tokyo on July 27 , 2003.

Engineered by Hiroshi Sato.

Mixed and Mastered by Venus Hyper Magnum Sound :

Shuji Kitamura and Tetsuo Hara.

Photos by Shinichi Takahashi.

Front Cover Photo by John Abbott.

Special Thanks: Mon Production : Yoshiki Nishikage.

B-flat : Hiroyuki Sugiya.

T. K. Blue plays Vandoren Reeds and Mouthpieces,

Peter Pozol Alto Saxophone Mouthpiece,

Yanagisawa Saxophone and Miyazawa Flute.

Designed by Taz.

実際、僕自身もここまでジミー・スコットが人気を博すとは想像もしなかった。以前、1992年にジミーが初来日した時、インタビューする機会に恵まれた。その時、13歳で母親を自動車事故で失ったことがいかにつらい体験だったか、初対面の若造の僕にまるで親しい知人に対するように、ジミーはストレートに吐露してくれた。そのことが強く印象に残っている。ああ、ジミー・スコットという歌手は、彼のリアル・ボイスと同様に話す内容もリアルで、もちろん優しくて、ほんの少しも偉ぶったところのない人なんだなあと深く感動したものだ。ジミーの叫ぶようなボーカルは、かなしい感情に彩られている。それを聴けば、すごくなくさめられるし、励まされる。つらいことがあっても、その痛みをやわらげてくれるような力を持っている。このようなジャズ・シンガーは何人存在しただろうか。ただ、あまりにもリアルなかなしい響きを持っているため、万人向きではないと思っていた。ジミー・スコット現象は、そんな僕の考えが間違っていたことを教えてくれたのだった。

それでは、このライブ盤を聴いていくことにしよう。ジミーのレパートリーを改めて眺めれば、愛にしる人生の教訓にしるリスナーの心の中に語りかけてくるようなナンバーが多いことがわかる。

オール・オブ・ミー

近年ジミー・スコットがオープニング・ナンバーにしているスタンダード・ソング。「私のすべて」というタイトルどおりの熱烈なラブ・ソングで、ルイ・アームストロングやフランク・シナトラらが得意にした。ジミーがこの曲を最初に歌うのは、観客へ感謝の気持ちをあら

わしたいからではないだろうか。

あなたは恋を知らない

一転して、2曲目はブルー・バラード。タイトルに示されているように恋の終わりの切ないモノロークだ。ポピュラー・ヒットはなかった曲だが、ジャズのカバーが多い人気ナンバーでもある。

瞳を閉じて

イギリスで生まれたスタンダード・ソングで、すぐにアメリカでもヒットした。これもハートフルなラブ・ソングだ。ライト・タッチのインストの人気バージョンが目立つ曲だが、ジミーの深く沈んでいくようなディープな表現はやはり貴重。

ペニーズ・フロム・ヘブン

ビング・クロスビー主演の映画(邦題は『黄金の雨』)の主題歌で、“お金の雨が降ってくる”という歌詞。つらさを励ます曲でもある。

タイム・アフター・タイム

フランク・シナトラ主演の映画『下町天国』のために書かれた曲で、シナトラが歌ってヒットした。“愛することが自分の幸せ”という歌詞。シンディ・ローバーの同名異曲のヒット曲がある。

時には母のない子のように

ジミーが昔から得意レパートリーにしている黒人霊歌。母親を失った孤児のような悲しみや望郷が歌われるこの曲は、そのままジミーの実人生に重なってくる。ジミーの悲痛な心の叫びに感動しないではいられない。日本には寺山修司作詞による同名異曲があり、そちらはカルメン・マキがヒットさせた。歌詞が似ているので、寺山はこの黒人霊歌を参考にしたと思われる。

アイ・クライド・フォー・ユー

ビリー・ホリデイをはじめ、女性シンガーに名唱が多いナンバー。“あなたのために泣かされた。こんどはあなたが泣く番”という歌詞。歌い方によって歌詞のニュアンスが変わる曲だ。ジミーはR&Bタッチのアレンジを採用しており、小気味いい感じがある。

ホワイ・ウォズ・アイ・ボーン

メンバー紹介からアンコールへ入る。“私はなぜ生まれたのか？”と問いかけるこの曲も、ジミーが歌えば人生のかなしさやつらさのようなものが込められている。日本でも大反響を呼んだジミーのドキュメンタリー・フィルムのタイトルになった。原曲はオスカー・ハマースタインの恋愛物のミュージカルで、愛を告げるシーンで歌われたと思われるが、歌い方によって人間存在の重さが伝わってくる曲である。エブリバディーズ・サムバディーズ・フール

ジミーがアンコールでよく歌うバラード。1950年にライオネル・ハンプトン楽団の録音に、デビュー当時のジミーが参加してR&Bチャートでヒットした曲だ。愛や人生の教訓を歌った曲だ。R&Bコーラス・グループのハートビーツや、10代のマイケル・ジャクソンがカバーしている。コニー・フランシスが大ヒットさせた同名異曲もある。

(高井信成)

この数年、最も熱い注目を浴びているベテラン・シンガー、ジミー・スコットの6度目となる来日ライブを収録したアルバムだ。収録は

2003年7月27日(日)、東京・赤坂のジャズ・クラブ “ B-flat ”。自己のグループ、ジミー・スコット&ザ・ジャズ・エクスプレッションズでの来日で、ピアノ・トリオは前回の来日と同じ顔ぶれ、サククスにT.K.ブルーが新加入したメンバーだった。アルバムは当日のセカンド・セットをライブの曲順どおりに完全に収録されている。ベースのヒル・グリーンがミュージカル・ディレクター、T.K.ブルーが進行役的な役割。オープニングの演奏の後にジミーがステージに登場。ジミーは「オール・オブ・ミー」をアップテンポで立って歌った後、椅子に腰掛けて次にバラードを歌う。その後は曲によって立って歌うこともある。

最近数回見たジミーのライブは、そういうスタイルだった。ジミーは2003年7月の日本ツアー中、7月17日の札幌のライブで78歳！の誕生日を迎えた。現役の人気シンガーとしては高齢であるわけだが、“奇跡の歌声”“天使の歌声”など最大の賛辞がおくられるジミーのボイスの魅力は、まったく変わることがない。むしろ、年齢を重ねるにつれて人生の深まりが年輪に刻まれるようにして、歌もますますディープになっているといえる。現役で歌い続けるために、体調などの自己管理を大切にしているのだろう。

思えば、この十数年間に起こったことは、ジミーにとって、また彼の歌を愛する人々にとって、非常に喜ばしい感激すべき出来事であった。「ソウルという言葉をみんなが使うようになる前から、ジミーはソウルを持っていた」という友人のレイ・チャールズの賛辞をはじめ、幾多の絶賛がおくられてきたにもかかわらず、度重なる不運に見舞われてきた“不世出”のシンガーが、やっと正統に評価される時代がやってきたわけだ。ワーナー系のサイア・レコード社長との出会い(1991年)、ジミーの歌を愛して止まないデビッド・リンチが監督した『ツイーン・ピークス』に出演して歌ったこと(同年)、そしてドキュメンタリー・フィルム『リトル・ジミー・スコット “ Why was I born ”』(1999年)のテレビ放映による反響などが、この十数年間に起こったジミー・スコット人気のきっかけになっている。とりわけ日本ではドキュメンタリーのテレビ放映以降、一気に人気が出たようだ。リリースの見込みのなかった過去の作品も次々に再発されるようになり、2000年には何と新作を含めて14枚ものアルバムがリリースされている。まるでレール単位で再発された年のフランク・シナトラである。インターネット上でも、「ジミー・スコット音楽辭星」「ジミー・スコット/ジャパニーズ・オフィシャル・ウェブ・サイト」という日本制作のホームページは、コンテンツが充実を極めている。こうしたジミー・スコット現象といえる人気ぶりに誰よりも驚いたのは、本人ではないだろうか。もっとも、ジミーの唯一無二のボイスは、ジャンルを超えてリスナーに深い感動を与えるに違いない、彼の歌を一度でも耳にすれば、誰もがそう思うだろう。だが、いくら優れた才能と実力を持っていても、過小評価されているアーティストはいつの時代も少なくない。